

第二章

黙示録の七つの教会 スミルナ

スミルナ——『没薬』より：『埋葬のための油注ぎ』——第2・3世紀



● スミルナの都市

スミルナ（現代のイズミル）は「ト・アガルマ・テス・アジアス——アジアの喜び」として知られていた宝石のように美しい場所でした。スミルナは当時も今も深い海に接する港街であり、35 マイル（約 5.6 キロメートル）南にあるエペソとは激しいライバル関係にありました。紀元前 600 年頃にその町は地震によって破壊され、紀元前 4 世紀まで再建される事はありませんでした。10 万人の人口を抱え、海の傍にはキュベレーの神殿を持ち、さらにはアポロや、アスクレーピオス、アフロディーテー、またゼウスに捧げられた目を見張るような神殿がありました。この都市は、発展した科学とぶどう酒の貿易で繁栄し、ラオデキヤのように薬でも有名でした。

『また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。

初めであり、終わりである方、死んで、また生きた方が言われる。

「わたしは、あなたの苦しみと貧しさを知っている。——しかしあなたは実際は富んでいる——またユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの会衆である人たちから、ののしられていることも知っている。あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日

の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。

耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない。」』(黙示録 2 章 8 節－11 節)

注目すべき事柄は、スミルナという名前がギリシア語の『没薬』を意味する言葉から取られたことです。没薬は基本的に埋葬の時、死者の体に塗るために使われていました。ヨハネ 19 章 39 節では、ニコデモがイエスの体に塗るための没薬を持ってきたとあります。雅歌の中で没薬は、花婿が没薬の山に上ると描かれている箇所です。それとなく触れられています。

『そよ風が吹き始め、影が消え去るころまでに、
私は没薬の山、乳香の丘に行こう。』(雅歌 4 章 6 節)

乳香とはいけにえをささげる時に焚かれたもので、その山は当然のことながら、イエスが処刑されたカルバリの山を指し示しています。

スミルナは、おおよそ使徒の活躍した後の 2・3 世紀、つまりニケア公会議以前の時代から、コンスタンティヌス帝 (紀元 321 年) やニケア公会議 (紀元 325 年) までの時代と関連しています。

イエスは黙示録 1 章のご自身の描写の中から、それぞれの教会が思い出すべきひとつの側面を教会に念押ししました。スミルナはイエスが死に、そしてその死からよみがえったことを思い起こす必要がありました。迫害は終わりではありません。その後永遠のいのちがあるのです。

「わたしは、あなたの苦しみを知っている」すべての教会と同じように、イエスは悪いことを扱う前にまず何が正しいかを示します。スミルナは (フィラデルフィアと同じように) イエスが何の悪い点も見出さなかった教会です。その理由は、その教会が迫害を受けていたからでした。文字通りにひどく迫害されながらも、信仰を保っている教会を批判するのは非常に難しいことです。

ロンドンのソーホー (Soho) という町はフランスから来たユグノーと呼ばれる人たちが定住した町です。ユグノーとは聖書を信じるクリスチャンで、ローマ・カトリック教会の手によって激しく迫害された人たちです。「聖バーソロミューの日 (8 月 24 日)」に人々は聖

バーソロミューの虐殺を思い起こします。当時のローマの権威者たちは、彼ら（ユグノー達）に平和と安全とを約束し、公の会合を開くために招きました。しかしユグノー達が現れた時、ローマの聖職者たちは彼らを処刑したのです。それは虐殺でした。このような迫害のためにユグノーの生存者たちはイギリスへ移り住みました。ある者は北アイルランドに行き、帽子や織物、レースなどの貿易を始めました。他の者たちはホワイトチャペル周辺のロンドンの東の端に定住しました。

結果としてソーホーは言うならばイギリスの「バイブル・ベルト（聖書の影響が強い地域）」となりました。そこには当時おそらく世界のどこよりも多くのクリスチャンが密集していたでしょう。彼らは毎日祈禱会を開き、聖書研究を行っていました。そしてユグノーたちは家から家へと回っていました。しかし今日ソーホーはロンドンの売春街となっています。かつては主が崇められ、みことばが学ばれ、福音が宣べ伝えられ、クリスチャンたちが日ごとに祈りや礼拝のために集まっていた場所が、ポルノと売春の巣窟となったのです。物事が逸れていくのに長い時間はかかりませんでした。そしてこのようなことこそが今日の西洋世界で私たちが目にしていることなのです。

● 未来の歴史的・預言的な対型

サタンがスミルナの教会を地域的な迫害によって『十日の間』苦しめたことは、一般的にキリスト教に敵対的だった一連の皇帝たちによる大きな迫害の10の期間を指すと言われています。皇帝たちはしばしばユダヤ人に対して反ユダヤ主義的な傾向を持っていました。これは蛇と女の間で敵意を置くと書かれている創世記3章15節の預言と関連しています。帝政ローマから教皇制によるローマ、また異端審問、鉄のカーテンの時代のソビエト主義、また現代の原理主義イスラムに至るまで、アブラハム、イサク、ヤコブの**神学的**子孫に敵対する者は、ヘブル人族長たちの**人類学的**子孫にも敵対します。真実の教会と、イスラエルの両方が神の契約の民であり、預言的な神の救いの計画がその民にかかっています。それゆえ、真実の教会とユダヤ人はこれまで、繰り返し同じ迫害者の標的となってきたのです。

ユダヤ人の絶滅にやっきになっているサタンの霊は、真実の教会をも絶滅しようと精を出しています。ローマから始まり、教会に敵対した国々の大部分がどれもユダヤ人に対しても敵対しました。ティトスが行った紀元70年のユダヤ人に対するエルサレムでの衝撃的な出来事は、教会を迫害したネロによって受け継がれました。同じような傾向がクラウディオス帝の治世にも顕著でした。二世紀に入ると、使徒の後の教会が始まりました。時を同じくして、シメオン・バル・コクバに率いられたユダヤ人第二の反乱により、ユダヤ人はエルサレムから除き去られ、聖書のイスラエルの地からのディアスポラ（離散）へと至

りました。ディアスポラはハドリアヌス帝の治世に勢いを増しました。その事と同時に、それに続く一連の気の狂ったような皇帝たちによる教会への多くの恐ろしい迫害が起こりました。その皇帝たちすべてが多神教を信じる異教徒であり、大半の者がバイセクシャル（両性愛者）でした。

ローマ皇帝たちが自ら招いた道徳的退廃のために、それまでキリスト教徒に突き付けられた故無き訴えがユダヤ人にも突き付けられ、すべてのことに関して彼らが責められていたことは驚くべきことです。この種の非難はキリスト教徒の虐殺を正当化するために使われ、コンスタンティヌス帝がローマ帝国を外見上だけキリスト教化した時に終わりましたが、ユダヤ人に対しては継続されました。それはただ帝政ローマの権力によって実行されなくなっただけであり、教皇制ローマの教皇権によって継続されました。教皇制ローマの教皇権は、いわゆる神聖ローマ帝国の下にその放蕩を続けました。この過程はネロとティトスによって初歩的な面を見せていましたが、スミルナの教会の性質をもって表される 2 世紀から 4 世紀の時代にはっきりとした様相を呈しました。スミルナのクリスチャンが現地で直面していたものは、2 百年間、ローマ帝国の中にあった教会を襲ったことの前触れであり、縮図であったのです。

ドミティアヌス、マルクス・アウレリウス、セプティマス・セベリトゥス、カリグラ、デキウス、ディオクレティアヌスらは、集中して迫害が行われた 10 の主要な期間を指揮した皇帝たちです。異教ローマのポンティフよりも、教皇制ローマのポンティフ（教皇）たちの方がより多くのキリスト教徒とユダヤ人を殺すことのできる鋳型を形成しました。実際、私たちがすでに見てきたように、真実の教会はポンティフのパンテオン（古代ローマの神殿）の外に置かれるレリギオ・イリシタ（違法な宗教）となりました。再び現代世界において、私たちは同じことをヨハネ・パウロ 2 世（本名カロール・ボイティワ）とベネディクト 16 世（本名ジョセフ・ラッツィンガー）の教皇権において目撃しています。どちらも自分達がいかなる**全ての信仰**とローマ・カトリック（彼らが主張する使徒ペテロの正当なるキリスト教）との間の『橋渡し』だと自称しており、新生した、聖書的な福音主義を非難しています。このような人たちはペテロの後継者ではなく、本来のポンティフの後継者、帝政ローマの反キリスト的皇帝たちの後継者なのです。

● 神に背くことは政治的、道徳的退廃へとつながる

私たちが目にしている西洋民主主義国家での、政治的また経済的、社会的退廃が、西洋の道徳的、霊的退廃の反映であることは疑う余地がありません。イギリスの国会の外壁にはラテン語で、「パテル・ノステル・クイ・エス・カエリス——天におられる我々の父」と掲げられています。最近のテレビで発表された統計によると、現代、国会議員の大半が全

く何の宗教も信仰していません。その中で多数派なのが名ばかりの英国国教会員たちです。その次に来るのが多くの無神論者や不可知論者たちで、次にイスラム教徒、仏教徒、ヒンドゥー教徒、ユダヤ教徒（救われていないユダヤ人たち。昔のディズレーリ首相はユダヤ人クリスチャンでした）、カトリック教徒などが続きます。これらの人々が、イギリスで実行されていたエラストゥスの教会システムを採用した政府のもとで、投票により司教たちを任命しています（エラストゥス 1524–1583 ハイデルベルクの医者で、教会の権威が世俗の政府を従わせるべきだと教えた人物）。このイギリス国会の中で神の存在さえも信じていない幾人かの者たちが、英国国教会の聖職者を任命しているのです！

● 誰にも惑わされないように

エバはイスラエルの象徴、また教会の象徴であり、彼女は蛇によって惑わされました。聖書中で蛇は欺きを表しており、一方、竜は迫害を表しています。スミルナでは蛇と竜が同時に教会を攻撃していました。

マタイ 7 章 15 節や使徒 19 章、第二ペテロ 2 章はすべて偽預言者や偽教師について警告しています。初代教会は外側にいた偽預言者からだけでなく、内側の者からも挑戦を受けており、そちらのほうがはるかに破壊的でした。初代教会では当時アリウス主義者たちがいました。アリウス主義者とはアリウス（紀元 250–336）から名前を取られた者たちで、イエスが創造された存在であるとし、イエスの神性を否定しました。今日それはエホバの証人として再び現れています。「日の下に何も新しいものはない」——逆にその反対の主義も存在し、『イエスだけ』が神であると信じ、御父をないがしろにする人たちもいます。

現在カンタベリー大主教のローワン・ウィリアムズ (*Rowan Williams*) は、ドルイド教（ケルト人社会における宗教）の式典に参加することに何の抵抗も感じない人物で、複数の信仰を受け入れるリベラルです。彼は明らかに同性婚の許可や、同性愛者の任職に精を出しています。ウィリアムズ大主教は、あのブレア政権（国会の民主主義的権威の多くをブリュッセルの選挙によらないヨーロッパ政治へと手放した政権）によって任命されました。彼らはイギリスの経済的先行きとイギリスポンドを、選挙で選ばれた政府とイギリス銀行の手から取り上げて、実質的にドイツ連邦銀行の後継である、フランクフルトの欧州中央銀行の手に置きたがっています（訳注…ユーロ圏に入り通貨を統合し、EU とイギリス経済を一体化しようとする試み）。イギリス女王は自身の持つ『国王の裁可（国王が持つ法を発効させる権利）』を一体どのように 1972 年の欧州共同体議員立法 (*European Communities Act 1972*) に与えてしまったのでしょうか。女王はその決定によって自身の主権、すべての統治者が守ると誓うものを明け渡してしまいました。

最近、BBC の国会記者は個人的な意見を表明しました。彼の立場は、国会民主主義制度がヨーロッパの官僚主義に変換されたことで、ヨーロッパが今までであった民主主義の原則から実質的に離れたと語っていました。非選出者たちからなる委員会は提案を作り、ただヨーロッパの国会へ助言を求めるだけになっています。国会はただの諮問機関（参考意見を聞くだけの団体）となっているのです。

過ちや、失敗、問題があったとしても、ピューリタンたちが民主主義の伝統を設立するのに大きな役割を果たしたことは忘れてはならないことです。現代まで受け継がれた民主主義の制度は、宗教的自由や良心の自由、信心の自由、また福音宣教の自由の出現と密接に関連していました。ピューリタンと彼らの先駆者たちはローマ教会と英国国教会双方の手によって非常に苦しめられました。彼らは今ある民主主義の伝統を聖書の価値観によって設立したのです。聖書的なユダヤ・キリスト教の道徳的原則から逸れてしまうとき、それらの原則の上に建てられている制度はひび割れ、それと共に消滅してしまいます。これが今基本的に起きていることです。物事が良い状態から悪い状態へ、悪い状態から最悪の状態へ変わるのに大した時間は必要ではありません。

ソビエト連合や、チェコスロバキア、ユーゴスラビアなどの東ヨーロッパの連邦国家は崩壊し、選挙によらずに選ばれた中央集権的な社会主義エリートによって国々は支配されなくなりました。その一方で、西ヨーロッパは連邦国家に破滅を招いたその中央集権化されすぎた体制に傾こうとしています。現在の政府はイギリスをまさにこの方向へと推し進めようとしているのです。聖書的なキリスト教から離れると、聖書的キリスト教がその形成に貢献した議会民主主義から離れてしまうのです。

ローワン・ウィリアムズ大主教はドルイド教の祭典に参加し、ウェールズの神話の中でドラゴンとして表されるケルト人の神の子の名前を儀式的な名前として受け取りました。今日では黙示録が反キリストを竜と象徴していることは何の興味も引かないようです。それゆえ、彼が黙示録を『さまよう文章』と呼んだことが 2002 年 1 月 6 日のデイリーテレグラフ紙に引用されたのは何も不思議ではありません

「安っぽい紙に文字がびっしりと書かれ、次から次へと偏執的な妄想と悪意で満ちている。それは聖職者がよく受け取る悲惨で、精神不安定な者の手紙のようだ」

カンタベリー大主教にとって、イエスさまによって与えられたヨハネの黙示録は神の聖なる言葉でもなければ、「偏執的な妄想と悪意で満ちている」ものなのです！

● 迫害への備え

イエスはスミルナの教会に、差し迫った迫害について警告されました。

『まことに、神である主は、そのはかりごとを、ご自分のしもべ、預言者たちに示さないでは、何事もなさない。』(アモス 3 章 7 節)

多くの国の歴史を通して、真実に新生したクリスチャンたちは当たり前には享受できるべきもののために迫害されました。これが東ヨーロッパやローマ・カトリック教国、イスラム教国、社会主義国家などでの現実でした。現代、私たちが当たり前を受けている自由が存在する理由は、16 世紀や 17 世紀の聖書を信じるクリスチャンの血によってそれが勝ち取られたからです。しかしいったん人が聖書の真実に背を向け、主とその戒めから離れるやいなや個人の自由はそれと共に無くなってしまいます。そしてそのことが今起ころうとしているのです。イエスさまが現代西洋世界の教会に迫害に備えるよう呼びかけていることには疑う余地がありません。それはスミルナの教会に警告を与えたことと同じなのです。

初代の信者たちの信仰はヘブル人への手紙に見出せます

『...またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。』(ヘブル 11 章 35 節)

初代信者たちは、この人生とこの世で繁栄するためにイエスさまが死なれたと考えていませんでした。彼らは来るべき御国で自分たちが繁栄するためにイエスさまが死なれたと考えていたのです。

『また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、』(ヘブル 11 章 36 節-37 節)

メルセデス・ベンツやキャデラックに乗って移動したわけではありません

『乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、—この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした—』(ヘブル 11 章 37 節-38 節)

今日有名で、繁栄した説教者の多くがしているように、五つ星ホテルに泊まるなんてこ

とはありえなかったことでしょう！

『荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。この人々はみな、その信仰によってあかしされました...』(ヘブル 11 章 38 節-39 節)

これが初代教会の信仰でした。彼らはイエスがこの世でのリッチな生活を送らせるために死なれたとは考えませんでした。イエスが死なれたのはもっと良い世界で、遥かに素晴らしい生活を与えるためなのです。

● 『神の国は今』神学

そのような偽りの教理を信じることは「支配主義神学」であり、または「神の国は今」神学とも呼ばれます。これは現代のカリスマ派やペンテコステ派の大半で非常に多くなってきました。基本的にそれはイエスが戻って来る前に教会がイエスのために全世界を征服し、イエスのために御国を設立するという考えです。教会が今、その神の国だと主張します！それはまた「実現された終末論 (*over-realized eschatology*)」とも呼ばれます。これは大きなムーブメントで、現代のイギリスやアメリカの多くの主要な福音派指導者により暗黙的に承認されています。よくある表現の中では、それは後の雨／神の子らの現れという異端的な要素とひとつになっています。それは1940年代のペンテコステ主義の主流によって批判されていたもので、超カルヴァン主義的な再建主義と一緒にしています。その超カリスマ派の支持者たちの中にはアメリカ人で反イスラエルの説教者リック・ゴドウィン (サンアントニオにあるイーグルズ・ネストチャーチで、あからさまになった金銭スキャンダルの件で有名) がおり、一方、改革派再建主義者たちはローザス・ラシュドゥーニー (*Rousas J. Rushdoony*) やギャリー・ノース (*Gary North*)、デイビッド・チルトン (*David Chilton*) などさまざまな神権主義者たちを引き込んでいます。

この種の非聖書的な教理はとても嘆かわしいもので、全く間違っており、キリストの体にとって潜在的に非常に危険なものです。そして突き詰めれば聖書的ではなく、ただの希望的観測です。イエスご自身が次のように明らかにされました

『人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日が起こったことと同様です。ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついでりしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。

また、ロトの時代にあったことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、売ったり、買ったり、植えたり、建てたりしていたが、ロトがソドムから出て行くと、その日

に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。

人の子の現われる日にも、全くそのとおりです。』(ルカ 17 章 26 節-30 節)

● パックス・ロマーナと国際化の中でのスミルナの生活

貧しい国での人々への搾取など植民地主義には否定的な面がありますが、肯定的な面もあります。たとえばより最近の『パックス・ブリタニカ (イギリスによってもたらされた平和)』ではイギリスははるかに危険な帝国を寄せ付けませんでした。東にはロシア、西にはフランスやスペインなどローマ・カトリック帝国が存在しました。イスラエルではイギリス政府がバルフォア宣言を破棄し、ユダヤ人を約束された地に帰さず強制収容所で滅ぼされるままにしたことなど、イギリス政府が行った悪事をみなが知っています。しかし現代のイスラエルには道路設備、ハイファ港、空港などが存在します。その国の大半の社会基盤はイギリスによって建設されたものなのです。

世界には人々が植民地主義をただ純粋に求めている場所があります。ジブラルタルの人々にスペイン人になるべきだとか、フォークランド諸島の人々にアルゼンチン人になるように、また香港の人々に中国人になるように言うてみたらどうなるでしょう。彼らはむしろイギリス人になることを望みます。それはコインの裏表です。またアジアやアフリカの多くの国々でイギリスが去った後に何が起こったかを見てみてください。

これは搾取的な植民地主義や帝国主義を擁護しているのでは決してありません。しかし言わんとしていることはコインに別の面があるということなのです。パックス・ブリタニカの下でイギリスは状況が異なっていたなら極度の問題を抱えていたような世界に、相対的な安定と、相対的な繁栄をもたらしました。イギリスは当時、その社会に存在した聖書的な影響によって神に祝福されていたと多くの人々が個人的に信じています。イギリスは 200 年間にわたって、どの国よりも多くの宣教師たちを送り出しました。ウィリアム・ケアリーやハドソン・テイラーなど多くの宣教師たちを思い出してください。今日もオペレーション・モビライゼーション (*Operation Mobilization*) や、ユース・ウィズ・ア・ミッション (*Youth with a Mission*)、クライスト・フォー・ザ・ネイションズ (*Christ for the Nations*) などの団体がありますが、かつてイギリスから出て活動していた真実で聖書的な宣教団体と比べると、影もかたちもありません。

第二次世界大戦の後に『パックス・アメリカ』が訪れました。当時ソビエトの脅威がありましたが、NATO の下にアメリカはイギリスと手を組み、基本的にヨーロッパに平和を

もたらしました。征服した国々を占領し、搾取することとはかけ離れて、アメリカはドイツや日本を自由市場を持つ西洋の民主主義国家に変え、繁栄と豊かさをもたらしました。これはすべてを肯定しているのではありませんが、イギリスが多くのクリスチャンで溢れ、多くの宣教師を送り出す国となったとき神がイギリスを祝福されたように、その同じ理由で神がアメリカを祝福されていたのです。第一にアメリカはどの国よりもイスラエルを祝福し守ってきました。また第二にアメリカは現在宣教師を最も多く送り出し、多くの国に最も多い額の宣教費を捻出しています。今日では宣教に使われるお金の4分の3がアメリカから出てきたものです。もしこのような現実がなければアメリカの妊娠中絶率だけを考えてみても、神の裁きはもっと早い時期に下っていたことでしょう。

一方でスミルナの時代には『パックス・ロマーナ』が優勢でした。ローマ人は他の勢力を抑えながら、さまざまな学派から自分たちの哲学を作り出していました。フェニキヤ人からは交易路を取り、あらゆる場所に道路設備を建設し、そのうちのあるものは現在も残っています。イスラエルでは『ヴィア・マリス』と呼ばれる『海の道』の跡が見受けられます。ローマ南部の地下墓地の近くには『ヴィア・アッピア』と呼ばれる『アッピア街道』が残存しています。ローマ人たちは社会正義のための裁判のシステムを作りました。また彼らは自分たちの言葉であるラテンを国際公用語（リング・フランカ）とはせずに、ギリシア語をもってきました。そしてその決定によって福音が広がったのです。バビロン捕囚の後には非常に大規模なユダヤ人のディアスポラ（離散）が起きました。それゆえ、ローマ帝国中の主要な町々には確立されたユダヤ人共同体がありました。それだけではなく、ヘブライ語聖書（タナク）のギリシア語翻訳である七十人訳が登場し、当時の国際公用語で利用可能となったのです。それゆえパックス・ロマーナの時代に福音は異邦人の間で広がる条件が揃えられたのであって、神は実際にそれを用いていました。その反面、パックス・ロマーナは自分たちに頼り、従順である者たちだけに平和と繁栄を与えました。

最終的な反キリストは異教ローマの皇帝崇拝を再び制定します。これが生誕物語の象徴で描かれているものです。イエスさまが生まれた時、皇帝は世界経済を支配するために人口調査を敢行しました。それが当時になされたことであり、これはまたイエスさまが戻って来られるときに起こることをいくらか暗示しています。ローマは共和制から専制君主制に移行しました。戦争中には元老院が専制君主を選任し、その人物の言葉が法律となりました。しかしその君主の治世がずっと戦争時代に入っている限り、継続的な独裁政権が続きました。また当時起こったことは過剰な物価高騰であり、その要因は歴史的にいつも独裁者を生み出してきました。ナポレオンやヒトラー、毛沢東など——現代の大半の独裁者たちであっても過剰な物価高騰の後に権力を握っています。そしてこれが古代ローマで起こっていたことなのです。

このようなことが反キリストが明らかにされる時再び起こります。困難な時に反キリストは多くの偽預言者や、いかげんな首相また大統領のように平和と安全を世に約束します。そして一年に一度の「主の日」にローマ市民が、皇帝に向かってひざまずかなければならなかったように、反キリストの支配下でも同じことが起こります。すべての人が反キリストの像を拝むよう強制され、拝まなければ殺されるのです（黙示録 13 章 15 節）。

EU 本部の周辺では、他のすべての宗教を同等とみなさない宗教を違法とする法律がすでに準備されているという噂もあります。このように「ローマ条約（1957年に調印されたEUの基本条約）」は真実のクリスチャンとタリバンを同じように見せるのです。レリギオ・イリシタ（違法宗教）としてです。教皇は自身をすべての宗教の霊的指導者であると認めるならどんな宗教でも認めると宣言するでしょう。そしてすぐれた知識——これが違法となるのですが——無しには誰もその主張に異議を唱えられなくなります！

それゆえローマが二、三世紀に行っていたことは、この世の終わりに何が起こるかを示しています。初代のクリスチャンたちがローマをバビロンと同一視していたことを思い出してください。ユダヤ人であった初代キリスト教徒たちは神秘宗教、バビロンでニムロデが始めたこの世の偽りの宗教制度が（創世記 10 章 10 節）、ギリシア世界の小アジア、ペルガモの都市に達し、そこからローマ世界に入ってきたことを知っていました。ギリシア人はニムロデを『ゼウス』と呼び、ローマ人は『ユピテル』と呼びましたが、それがその起源なのです。初代のクリスチャンたちはローマとバビロンを関連付けており、特に偽りの宗教とこの世の墮落した政治が組み合わさった点においてそうでした。このように彼らはローマをバビロンと理解していました。初代の信者たちが黙示録を読み、最も邪悪な町を表している七つの丘の上にいる女のことを読んだなら、すぐさまローマのカピトリーナ（首都の立つ丘）のことを思い浮かべたでしょう。彼らにとってローマは確実にバビロンだったのです。

ローマ人は人々に相対的な平和と繁栄を与える方法を見つけただけでなく、ひとつの条件を課すことによって自治権を与え、民に自分たちのアイデンティティ、宗教を保持させたことを心に留めてください。条件とは年に一度皇帝に向かってひざまずくことでした。

今、この世（世界）が向かっている方向を見てください。今日、国民国家は崩壊し、国々は再編されてきています。世界のどこに行ってもジェネラル・モーターズや、パークレーズ銀行、ペプシコーラ、三菱などの企業はあり、すべての国の経済で多国籍企業が優位に立っています。労働組合が現在は国際化してきています。この世界は、もはや経済問題や経済の国際化問題をひとつの国で独自に解決できないものとなっています。そしてどの国

も独自に環境問題を解決することもできません。汚染された大気は国境をとわず広がります。ヨーロッパのドナウ川は15の国々をまたいでいます。しかしその一方で、チェコ共和国とスロバキア、またユーゴスラビアなどの国が分裂し、誰もどうすれば良いのか分からない状況にあります。しかしローマ帝国の終わりの時代もほとんどこれと変わらないものだったのです。

今日、ある人たちは自分たちが解決策を持っていると考えています。それは独裁者や実力者、国に頼るといふもので、それらがすべての面倒を見てくれるといいます。約25年前にベルギーの首相が実際に次のように言いました。

『もし誰かが現れて、この経済的な混沌から安定に導いてくれるなら、その人が神であれ悪魔であれ、私たちは従うだろう』

それが異教のローマで起こったことであり、現在の世界で起こっていることです。

獣のしるしが人の右手に埋め込まれるマイクロチップ状のクレジットカードであれ、そうでなかろうと、獣のしるしをその手に受ける人は、そのしるしをもうすでに心の中で受け取ってしまっています。そのような人は物質主義的な世界観を持ち、彼らの望みはこの人生とこの世にあるのです。次第に誰かが現れてこう言うでしょう。「みなさんは自分のアイデンティティーや自主性を持ち、地域の統制ができます。私が国際的なシナリオに合うようにしましょう——ただ信頼してください」

アメリカの大統領選挙戦が組織化される方法、またイギリスでそのようなことが始まっている様子を観察してください。すべてがマスコミのばか騒ぎや、世論操作、消費者心理学によって行われています。政治の世界でそれは一般に人気を得ている「スピン・ドクトリング (*spin-doctoring* 悪い物事を良いように見せること)」と同等に見られています。実質的な問題には少しの注意も向けられず、基本的にすべてに心理学の方法が用いられ、情報操作的に政治家たちが描かれています。そしてこれが教会にさえも入り込んできているのです。このようなこともローマ皇帝たちが行ったことでした。

今日の政治家たちは二つの問題、ローカリゼーション（地域化）とインターナショナルリゼーション（国際化）を調和する方法を見つけ出そうとしています。今の世界の発展の仕方は皇帝崇拝を生み出した時の世界の発展の仕方と全く同じです。これが初代教会が反対していたことなのです。ペルガモの教会の時に説明しますが、当時ローマのパンテオン（神殿）では、すべての神々が神と見なされ、崇拝されていました。人々が他にどんな神々を信じていようと、皇帝にひざまずきさえすれば何も問題は無かったのです。

現代では何が起きているのでしょうか？英国国教会の学校でさえヒンドゥー教やイスラム教、仏教などを教えています。ニューエイジ哲学が西洋社会に広がりつつあります。まさにこのようなことに対して初代教会は反対していたのです。

● 偽りのユダヤ人、サタンのシナゴーク

『わたしは...ユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの会衆である人たちから、ののしられていることも知っている』（黙示録2章9節）

使徒の時代の後、教会は徐々にですがユダヤ的ルーツから遠く離れて行きました。またより多くの異邦人が信者になるにつれて、このようなことが起こるのは人口統計上、また文化的に当然のなりゆきでした。しかし神学的にそれが起こってはならないとパウロはローマ11章で警告しています（「すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません」1節）。ヨハネ・クリソストムス（紀元345-407 398年のコンスタンティノープル主教）などの時代になると、それは神学的にも現実となりました。教会はただユダヤ的ルーツから離れただけではなく、ユダヤ人に**敵対**するようになり、強硬な反ユダヤ主義の性質も持つようになりました。とはいえ、キリスト教徒の反ユダヤ主義が発生するはるか以前に、未信のユダヤ人がユダヤ人クリスチャンを迫害していたことを忘れてはなりません。（当時レリギオ・リシタ—合法の宗教とレリギオ・イリシタ—違法の宗教があり、ユダヤ教は合法の宗教であり、キリスト教はコンスタンティヌス帝が紀元321年に合法と定めるまで違法でした）

パックス・ローマの下ではいかなる宗教でも、人々が皇帝の前でひざまずきさえすれば許容されていました。ユダヤ人たちはこれに関し問題を抱えていました。なぜならヘブライ語での『礼拝する』—ヒスタカボート (*hishtachavout*) は、崇拝の行為としてひざまずくことを意味するため、ユダヤ人にはできない行為でした。しかし彼らはうまく交渉しました。皇帝に**向かって**いけにえを捧げるのではなく、皇帝の**ために**いけにえをささげるとしたのです。

初期の頃のユダヤ人クリスチャンたちは、ユダヤ教の中の分派であるメシアニック・ジューであるとしか見なされていなかったので保護されていました。しかし彼らがイエシュアをユダヤ人のメシアと信じていたためシナゴークから破門されると、レリギオ・リシタの立場を失いレリギオ・イリシタとなりました。つまり、ローマにひざまずかない無認可で非合法の宗教となったのです。それゆえ、ラビによる権威は自らユダヤ人クリスチャンを迫害し、さらに異教ローマ人の手によって迫害を行わせました。

『ユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく』（黙示録 2 章 9 節）パウロはこれについてローマ 2 章の終わりで書いています

『外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです。』（ローマ 2 章 28 節－29 節）

これは何も新しいことではありません。パウロはこれが、神が昔から意図しておられたことだと説明しました。真実の者と偽りの者を区別することは神のみこころでした。これは特に霊的な面において真実です。この区別は多くの患難を通ることによってのみ達成されます。

『神である主はこう仰せられる。心にも肉体にも割礼を受けていない外国人は、だれもわたしの聖所に入ってはならない。イスラエル人の中にいる外国人はみなそうだ。』（エゼキエル 44 章 9 節）

ひとつの区別は、肉体的な割礼と心に割礼を受けていないことの間にあります。これは預言者エレミヤ書でたびたび繰り返されているテーマです

『主はこう仰せられる。「知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。わたしは主であって、地に恵みと公義と正義を行なう者であり、わたしがこれらのことを喜ぶからだ。——主の御告げ——見よ。その日が来る。——主の御告げ——その日、わたしは、すべて包皮に割礼を受けている者を罰する。』（エレミヤ 9 章 23 節－25 節）

彼らは**肉体的には**割礼を受けていましたが、心は**無割礼**でした。そして続きます

『エジプト、ユダ、エドム、アモン人、モアブ、および荒野の住人でこめかみを刈り上げているすべての者を罰する。すべての国々は無割礼であり、イスラエルの全家も心に割礼を受けていないからだ。』（エレミヤ 9 章 26 節）

神はイスラエルの民族性よりも、人が心に割礼を受けているか受けていないかという問題に目を向けておられました。イスラエルが心において無割礼であったとき、神は彼らを異邦人の国々のさなかに放り投げられたからです。彼らは異邦人の国々と同じぐらい悪く、

ある点では彼らがトーラーを持ち、よく知っているべきであったために彼らより悪かったのです。

ヨハネの福音書でイエスさまが言われたことを思い出しましょう

『わたしが、父の前にあなたがたを訴えようとしていると思っはなりません。あなたがたを訴える者は、あなたがたが望みをおいているモーセです。もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。...』(ヨハネ 5 章 45 節 - 46 節)

イエスが訴えるのではありません。トーラーが訴えるのです。未信のユダヤ人たちが、イエシュアのことをメシアと信じないことが本当の問題ではありません。それは問題の結果です。本当の問題は彼らがトーラーを信じないことにあります。彼らはモーセと預言者たちを信じていません。ユダヤ人たちが心に割礼を受け、本当にタナク（旧約聖書）を信じ、モーセと預言者を本当に信じていたなら、彼らはイエスがメシアだと分かるはずです。彼らがイエスをメシアと認めないことは本当の問題ではありません。それはトーラーを信じないことの悲惨な結果なのです。

しかし教会についてはどうでしょうか。ユダヤ人であっても名ばかりのユダヤ人、また人類学的なユダヤ人、社会学におけるユダヤ人、遺伝的なユダヤ人、さらに宗教的なユダヤ人もいます—彼らは本当に問題とされる点以外は、あらゆる面においてユダヤ人なのです。ですが本当に問題とされるのは心におけるユダヤ人です。キリスト教界も全く同じです。キリスト教界の中には社会学におけるクリスチャン、文化的なクリスチャン、またキリスト教のシンボルを身に付け、教会の礼拝に行く宗教的なクリスチャンさえいます—本当に問題とされる点以外は、彼らはあらゆる面においてクリスチャンなのです。しかし彼らは心に割礼を受けておらず、新生してもいません。これがスミルナで起きていたことであり、また終わりの日においても再び起こることです。

パウロは心に割礼を受け、ユダヤ人として生まれたなら、そこには有利な点があると語っています。それは彼らに神のことば—聖書本来の文化とその言語が属しているからです(ローマ 3 章 2 節)。当然それは実際的な利点ですが、すべてのことがイエシュア、イエスに信仰を置いているかどうかにかかってきます。イエシュアへの信仰が無ければ、ユダヤ人であることに意味はありません。

イスラエルに対して愛を持ち、イスラエルを理解している人でも、イエスを愛し、イエスを理解するということとイスラエルに夢中になることを取り違えてしまっているクリス

チャンたちが多くいます。彼らは小さな子供がガラリヤに生まれ、ヘブライ語を喋っていると非常に驚きます。しかし彼らはその子供が聖書のいうメシアであるイエス、イエシュアを信じるよう育ててられるという素晴らしい証には驚嘆しません。もし彼らが驚いたなら、本来驚嘆すべきことを驚嘆しているのです。心におけるユダヤ人でなければ、ユダヤ人であることに何の意味もありません！

今イスラエルに住んでいるルーマニア系ユダヤ人たちがいます。彼らはまずホロコーストを経験し、そこから生存しました。その後、彼らは共産党主義者の下で11年間国外移住を拒否された者となり、チャウシェスク（ルーマニアの独裁者）に賄賂を贈り、イスラエルへ向かいました。そして今はガラリヤに住んで、ガスマスクを着け、シェルターに隠れています。彼らの本当の問題は、戦争の脅威が常にある国に住んでいることではありません。彼らの本当の問題は今も言えることですが、イエシュアをメシアとして受け入れていないことにあります。それが彼らの**本当**の問題なのです。

ユダヤ教をほぼ聖なる宗教としている文献は山のようにありますが、実際には、聖書的に真実なユダヤ教が2種類だけ存在します

- ひとつは紀元70年以前の本来のトーラーによるユダヤ教。神殿が崩壊してからのいけにえの制度には終止符が打たれました
- もうひとつは、メシアなるイエシュアによって実現したメシアニック的ユダヤ教

それと対照的に今日のラビによるユダヤ教は偽りのユダヤ教であり、偽りの宗教です。それだけではなく、聖書によれば最も悪い部類の偽りの宗教です

『偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否認する者、それが反キリストです。だれでも御子を否認する者は、御父を持たず、御子を告白する者は、御父をも持っているのです。』（1ヨハネ2章22節-23節）

現代、神殿の丘に立つオマールモスクにはコーランのスラーからの引用が刻まれています。「神には子がない」そのようなものが神殿の丘にあるのです！このようなことがイスラム教が反キリスト的な宗教だということを示しています。しかし現代のラビ的ユダヤ教も同じです。どちらも公にイエシュアがメシアではないと否定し、御父と御子の関係を否定しています。このヨハネの手紙の言葉のように、新約聖書はこれがヘブライ語でのサール・ハ・マシアク (*Sar ha mashiach*)、ギリシア語でのアンティクリストス (*Antichristos*)、つまり反キリストによるものだと書いています。

超正統派のユダヤ教徒たちが毎週土曜日に読むものの中に、ハ・ビルカット・ハ・ミニーム (*Ha birkhat ha minim*) と呼ばれるものがあります。そこにはハシモネ・エスレ (*Hashmoneh Esreh*) と呼ばれる 18 の祝福があります。しかし彼らは「～は祝福される」という 19 番目のビルカット・ハ・ミニームを付け加えました。しかしそれは祝福ではなく呪いです。毎週土曜日に彼らはいのちの書から、イエシュアを信じるユダヤ人信者の名前が消し去られるように祈っています。超正統派はこのように今なお祈っており、何世紀もそうしてきました。意味ありげに彼らはイエスの名前をイエシュアではなく『イエシュ』と呼びます。それは「彼の名が消し去られるように」という言葉の頭文字なのです。

一世紀にユダヤ人たちがユダヤ人信者を迫害していたように、今日も彼らはユダヤ人信者たちを迫害しています。エルサレムにあるキリスト教のCongregations、セント・ポールズというところは、超正統派ユダヤ教徒たちの手によって 5 回火炎瓶を投げ付けられました。エルサレムのバプテストハウスは正統派ユダヤ教徒による放火に遭いました。ティベリアのメシアニック・Congregationsは信者たちが上の階に逃げた後に放火に遭いました。その後に暴徒たちは信者の子供たちに向かって投石しました。これはアシュドデで再び起こりました。そうです、サタンのシナゴグは今もこのようなことを行っているのです。

ユダヤ人を愛する愛は、彼らのために死なれたイエスの愛であるべきです。パウロは次のように言って彼の愛を明らかにしました。『私が心の望みとし...求めているのは、彼らの救われることです』(ローマ 10 章 1 節、またローマ 9 章 13 節) これが**聖書**的な愛です。しかしラビ的ユダヤ教は『聖なるもの』ではありません。それはサタンによる、どの偽りの宗教とも同じくらい歪んで、偽りとなった宗教です。それはメシアを呪い、自分の民を自らの聖書に敵対させ、トーラーを曲解しています。それはユダヤ人クリスチャンの名が消し去られるように祈っています。またこのようなことが反キリストによる最終的な欺きにユダヤ人を備えているのです。これが現実における非聖書的なユダヤ教です。

多くの人がユダヤ教とキリスト教はイスラム教に敵対する『同盟』だと主張します。しかし**すべての**宗教がイエスに敵対しています。イエスはかつて一度もひとつの宗教を教えませんでした。彼はご自身との関係を通して成立する、神との関係性を教えたのです。イエスは宗教と**反対**のことを教えました。**すべての**宗教は人が神に達しようとするものです。しかし天の御国の良き知らせである福音は、人に手を差し伸べるために神が天から降りてきたことについてのものです。

- **メシアは到来していた**

ダニエル 9 章 25 節から 26 節でダニエルは神殿が再建され、後に破壊されると語っています。ラビ的な書物であるタルムードのヨクートでは、メシア（油注がれた者）はエルサレムが崩壊する前に来て、死ななければならないと説明しています。そのことがまさにタルムードに書かれていることです。サンヘドリンは泣きながら言いました。「オイ・ヴェ・オイ・ラヌ」——「私たちの上にわざわいがあるように。神殿が崩壊したのにあなたは来ないからだ」彼らはそのようなことを知っていました。

有名なラビでラビ・レオポルド・コーヘン (*Rabbi Leopold Cohen*) という人がいました。彼は預言者ダニエル書を読んだ時にそれを理解できなかったため困惑しました。そして彼はタルムードを開き、ダニエル 9 章が何を語っているかを理解しようとしました。そしてタルムードの中でひとつの箇所を見つけました。そこにはダニエル書を読む者は誰であれ呪いを受けるということが書かれてありました。ダニエル書には世の終わりともメシアの到来がそこに書かれているからだということです。彼はタルムードの他の箇所でダニエル 9 章を説明している箇所を見ると、メシアがすでに来たことが裏付けてありました。そうです、タルムードはイエスがすでに来たこと、しかし彼らはそれが誰か知らなかったことを書いています。そこでラビ・コーヘンは大きな問題を抱えました。彼はまず何をすれば良いか分かりませんでした。こう言いました。「タルムードには、この書を読む誰の上にも呪いがあると書いてある。しかしこの書がメシアとその到来についてであることが私には分かっている。私はどうすべきなのか」

そこでラビ・コーヘンはバプテスト派の牧師になることを選択しました。彼はアメリカン・ボード (*American Board of Missions to the Jews* チョーズン・ピープル・ミニストリーズの前身) の創始者となりました。

まとめると、本質的に三種類のユダヤ教があります。第一はモーセとトーラーのユダヤ教で、主イエスによって成就されたものです。第二は（後にキリスト教として知られる）新約聖書のメシアニック的ユダヤ教で、イエスが前者を成就したと信じる者たちによるものです。第三に、生ける水の泉であるメシアを退けた後に設立されるとエレミヤが預言した（エレミヤ 2 章 13 節）、ラビたちによる偽りのタルムード的ユダヤ教です。

イエスはマタイ 24 章とルカ 21 章のオリーブ山の訓戒でこれに気付いておられました。彼はダニエルの預言を繰り返し、『石がくずされずに、積み残されたまま残ることは決してありません』と言い、神殿が崩壊すること、またメシアが来るが取り去られること——つまり殺されることを語りました。それゆえラビたちは大きな問題を抱えているのです。ダニエル書の預言は成就し、イエスの預言も実際に起こり、メシアが来て死んだ後に神殿は崩壊

しました。これらのことは明確に起こりました。

● ふたりのラビの物語

非常に有名なラビでラビ・ガマリエルという人物(使徒 22 章 3 節、また使徒 5 章 34 節)がいました。ラビ的な文書には、そのラビ・ガマリエルが死んだ時「彼と共に義が地上から消え去った」とまで書かれてあります。それほどラビ・ガマリエルは偉大だと考えられていました。そして使徒 5 章 34 節では彼がキリスト教を擁護したことが書かれています。彼はイエスがもしメシアでなかったなら、他の多くの分派のようにイエスの分派も消滅するだろうと言いました。しかしもし、それが神からのものであれば人が止めることはできないと語りました。

ラビ・ガマリエルはラビ・ヒレルの孫でした。ラビ・ヒレルとはヒレル学派、またはヒレルのラビ養成学校の創始者でした。パリサイ人の学派にもシャンマイ学派とヒレル学派という 2 種類の主要な学派がありました。ヒレル学派はより善意ある学派で、神は異邦人をも愛しているという一種の普遍主義を持っていました。これがタルソのラビ・サウロが訓練を受けた場所です。

ラビ・サウロの一人の興味深い学友はラビ・ヨハナン・ベン・ザッカイでした。彼は「力強い金槌」と呼ばれていました。紀元 70 年に神殿が崩壊した後、彼らはヤブネで会議を開き、これからどうするかを協議しました。動物をささげる場所が無い宗教をどうやって実行できるのかという問題がそこにはありました。ラビ・ヨハナン・ベン・ザッカイはラビたちが、コハニームとレビイーム、つまり祭司とレビ人にとって代わることを提案しました。さらにシナゴグを神殿の代わりとしました。善行など人が編み出した儀式などは、いけにえの制度にとって代わるようになりました。

レビ記や申命記を読むと、モーセの律法の最大の割合がいけにえと神殿での儀式に充てられていることがはっきりと分かります。しかし彼らは、神殿が無いためそれを守り通すことができなかったので、シナゴグを基盤にしたもうひとつの宗教を生み出しました。彼らは今なおこの人が作った宗教に従っています。

タルムードによると、ラビ・ヨハナン・ベン・ザッカイはその人生の終わりに泣いていたとあります。彼の弟子たちは来て尋ねました。「力強い金槌よ、あなたはなぜ泣いておられるのですか？」

ラビ・ヨハナン・ベン・ザッカイは答えました。「私はもうすぐ偉大な神、ハシエムに

会おうとしている。御名がほめたたえられるように。私の前にふたつの道がある。ひとつはゲヘナに、またひとつはパラダイスに続いている。だが神がどちらを宣告されるか私は分からないのだ」

彼は救いの確信を持っていませんでした。実際、その宗教を作り出したことで神が自分を地獄に送られるかどうか分からなかったのです。このためラビの書物によると、彼は死の床にあって泣いていたのです。それとは対照的に学友であるタルソのラビ・サウロ、『使徒聖パウロ』はその死が近づいた時に言いました。

『私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。』(2テモテ 4章 6節-8節)

それゆえユダヤ人はこのふたりのラビ、どちらかに従うことを選ぶ歴史の転換点まで達していました。それは、トーラーがメシアなるイエシュアによって成就したことを見たタルソのラビ・サウロに従うか、ラビ・ヨハナン・ベン・ザッカイに従うかのどちらかでした。ラビ的ユダヤ教は後にラビ・アキバを通して数世紀にわたって発展しました。しかしその始まりは悲しいものだったのです。それゆえ、これがサタンのシナゴグ、偽りのユダヤ教の起源であり、特にスミルナにおいて彼らがユダヤ人クリスチャンたちを迫害したのです。

● 初期の注解者たち

第一また二世紀を理解しようとする人たちにとって有益な文書は『十二使徒の教訓 (ディダケー)』です。また『ヘルマスの牧者』や (本来のバルナバによって書かれたものでないことは確かですが) 『バルナバの手紙』も重要なものです。残念なことにそれはみな反ユダヤ主義的になってしまいました。ですが私たちはそこから初代教会がいかに聖書の象徴を理解し、初代教会が支持した聖書理解としてのミドラッシュの手法がどのようなであったかを知ることができます。

例を挙げるとユダヤ人は豚を食べることができませんでしたが、豚は真実に興味が無く、それをただ嘲る人と関連しています。イエスは『豚の前に、真珠を投げてはなりません』(マタイ 7章 6節) と言いました。彼は真珠や豚のことを話していたのではなく、神のことばと、それをただ嘲る汚れた人々のことを話していました。コシエルの律法、食事規定

の律法では、豚は嘲る者を象徴しています。これが彼らの理論的根拠でした。

同じようにイエスは『あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう』（マタイ 4 章 19 節）と言いました。イエスは伝道の象徴として漁を用いました。海は国々を象徴していて、船は教会を象徴しています。イエスは弟子たちにどこに網を投げるべきかを告げました。それは彼らを伝道者にすることが、ご自分にはできるということを示すためでした。イエスがどこに網を降ろし、仕掛けを降ろすかを示されるまで彼らは何も捕れませんでした。同じように、誰もイエスや聖霊がどこに網を降ろすかを示されるまで何も捕ることはできません。甲殻類は海底に暮らしています。それはこの世に深く浸かりすぎて捕まらない魚介類を象徴しています。それゆえ甲殻類はコシェルではありません。この解釈法には論理と妥当性があり、間違いではありません。問題となるのは「ユダヤ人が網に捕らえられるようにと神は決して意図していなかった」と付け加えて、反ユダヤ的になってしまう時です。

また別のものでは紀元 199 年頃にリヨンの主教となったエイレナイオス (*Irenaeus*) による『異端反駁 (*Contra Heresium*)』という書物があります。エイレナイオスはスミルナの主教であったポリュカルポス (*Polycarp*) の弟子で、ポリュカルポスはマルクス・アウレリウスの治世紀元 155 年に殉教しています。ポリュカルポスは彼自身使徒ヨハネの弟子でした。これら三人の著作家は未来のキリスト教にとって非常に重要な存在となりました。

教会に対して、また教会を擁護するために書物を記した主要なギリシア人弁論家は殉教者ユスティノス (*Justin Martyr*) という人物です。彼はパレスチナに生まれ、165 年頃に書物を記しました。彼が最初期の人物であること、またパレスチナ出身であることは、初代教会が信じていたことを知る上での重要な情報源となりました。ラテン系民族で主要な弁論家だったのがテルトゥリアヌス (*Tertullian* 紀元 160–220) です。

教会教父と呼ばれ、その著作が教父文書と呼ばれた 2 種類の人たちがいます。前者はニケア公会議以前、コンスタンティヌス帝以前の人物たちです。ニケア公会議以前の教父たちは使徒により近い者たちでした。彼らの著作は非常に聖書的で、初代教会が実際に信じていたことと多くの点で調和しています。彼らについて確実に知られていることは、例外なくニケア公会議以前の教父たちが、イエスがこの地上で千年間治める文字通りの千年王国があると信じていたことです。後千年王国説（イエスの再臨が千年王国の成立後に起こるとする説で別名は千年期後再臨説）はアウグスティヌス（紀元 354–430）と彼に影響された者たちによって作り出されたものです。しかしニケア公会議以前の著作家の全員は、黙示録 20 章を成就されるため文字通りの千年王国があるはずだと使徒たちが教え、そう信

じていたと語っていました。

● アンティオケのイグナティオス

アンティオケの主教イグナティオス (*Ignatius* 紀元 35–110) は、主イエスへの信仰を否定することを拒み、トラヤヌス帝の治世 (紀元 98–117) にローマに連れて行かれ殉教しました。彼は闘技場で野獣に投げやられました。彼についての記録は、彼がローマに連れて行かれる間に記した七つの手紙から来ています。彼の罪状は、「カエサルは主である」と言っただけで、至高の主であるイエスを否定しなかったことだけでした。スミルナからローマに行く途上で、イグナティオスはエペソやマグネシア、トラレス、ローマにある教会に手紙を書きました。トロアスから彼はフィラデルフィアの教会に対して書き送り、また自身の教会であるスミルナにも書き送り、その教会の主教で後に殉教者となるポリュカルポスにも書き送りました。彼は恐ろしい選択の前であって、確実に他者を励ます者となっていました。

その手紙に何度も登場する内容は、彼の下にいた主教や、長老、執事に従い続けるようにということでした。彼はまた「聖餐式は主教や主教が任命した長老によって行われるのでなければ有効ではない」と教えていました。彼はまた「ローマの地にある教会が最高の権威を持つ」と語っていました。これはおそらくローマの主教の権威を認めていたのでしょう。ローマはその当時から存在していますが、そうであるからといって正しいわけではありません。彼はその考えを『監督一身制 (*Monoepiscopacy*)』と呼びました—ひとりの主教、ひとりの指導者という意味です。

イグナティオスに対して聖書的な教会は—聖書を綿密に調べると—指導者の複数制を信じ、実行していました。使徒 15 章には使徒や長老たちが集まって、教理的決定をした場面が登場します。パウロとバルナバが諸教会を開拓したとき、彼らは『長老たち』を任命しました—それは複数です。プレスブテロイ (ギリシア語での『長老』) は新約聖書で 5 回登場しますが、それはいつも複数形で用いられています。イグナティオスは教会を誤りから守るために、ひとつの町にすべてを総括するリーダーがいるべきだと考えました。特に使徒たちによって開拓された教会においてそうすべきだと考えていました。

そうは言っても、エホバの証人といくつかのブレザレンは自分たちを治めるのに長老の複数制を敷いていますが、彼らこそすべての教派の中で最も統制が厳しいグループとなっています。そのような人たちはカルトと呼ばれる場合もあるかもしれません。しかし使徒 15 章で使徒たちは互いに意見を出し合い、ルカが記しているように『聖霊と私たちは...決めました』(使徒 15 章 28 節) と結論を出しました。その日の終わりにみな自分たちの考

えを素直に神に尋ね、神に求めていたことを確信することができたのです。良い王たちはいつも主に伺いを立てていました。人は神に尋ねるべきであり、神はそれに答えられるお方です。人は神の答えを勝手に作り出してはなりません。

殉教者であったイグナティオスを侮辱するわけではありませんが、彼の信仰は疑問がないほどのものであったとしても、教えについては確実に問題がありました。少なくとも教えのいくつかの部分にです。イグナティオスは教会を組織化する上で非常に重要な役割を果たしました。しかし彼は蛇と竜の問題と格闘していました。つまり内からの欺きと外からの迫害です。そして彼は自身が良かれと思った方法で、この問題に取り組もうとしました。彼が主教のことを誤って理解していたという見解は信頼できるもので、彼が新約聖書全体を持っていなかったという可能性もあります。それゆえ彼のモデルが旧約聖書の大祭司から取られたのかもしれませんが。一方でイグナティオスは主を否定しませんでした。

イグナティオスは殉教者の冠についても風変わりな考えを持っていました。彼は次のように教え、他の者たちにもこう信じるよう教えました。それは信者が獅子と共に闘技場に入れられたとき、聖霊の油注ぎにより獅子が恐れるということが時々現実に起こりました。獅子はクリスチャンの上にあるシェキナーの栄光のゆえに彼らを恐れたのです。どんな素晴らしい教会だったことでしょう！しかし彼は人々に殉教者の冠を切望するよう教えました。イグナティオスは獅子が襲ってこないなら自分から襲っていくようにと教えました。そうするのは殉教者の冠を奪われないためだということです。このゆえに彼の考えに従った人々は結果として自分たちを死に至らしめました。これは自殺や神風と同じで、最良の動機があったとしても問題があり、危険な慣例なのです。

後にこれらの人たちは『教父』として知られ、年代が古い者が東では総主教であり、西では教皇たちでした。たとえば彼らはエペソの教会が使徒たちによって設立されたため、使徒たちの真実の教えはエペソの中にまだ留まっていると主張しました。それゆえ彼らは系図に注目するようになりました。ヨハネがポリュカルポスを訓練し、ポリュカルポスがエイレナイオスを訓練したというように、系図をたどるようになったのです。しかしこれは聖書的なモデルではありません。イグナティオスは、誰でも教えに従わない者たちを拷問し、その血を流したカトリックに至るような、単一の主教制度を一度も意図しなかったかもしれません。しかし彼はそのようなものが発達する舞台を整え、実際に発達してしまったのです。

しかしこれらの時代には特定の違いがありました。ニケア公会議以前、コンスタンティヌス帝以前には、もしクリスチャンが「カエサルは主である」と言わなければ、その人を殺したのはカエサル、ローマ皇帝であって、ラテン語を話すポンティフィカス・マキシマ

ス (*Pontificus Maximus*) でした。しかしニケア公会議後、コンスタンティヌス帝後の教皇たちが支配権を握った頃になると、もしクリスチャンが教皇に従わなければ (ほかでもない) ローマ帝国の教皇、同じくラテン語を話すポンティフィカス・マキシマスがその人たちを殺したのです。それはダニエル書の第四の獣を思い起こさせます。その体制は鉄の支配を終わりまで続け、やがて地球全体を覆うようになります。

● ヨセフ—イエスの型、ダビデ—イエスの型

ユダヤ的な観点にはふたつのメシア像があります。『ハ・マシアハ・ベン・ヨセフ』と『ハ・マシアハ・ベン・ダヴィード』、つまり『ヨセフの子なるメシア』と『ダビデの子なるメシア』です。ヨセフとダビデの特徴を含むすべての律法と預言者たちは、何らかの形でイエスを指し示しています。

創世記 37 章でヨセフが兄弟たちの手によって異邦人に渡されたとき、神はその状況を好転させ、全イスラエルが救われる道を備えました。同様にミドラッシュ的にイエスもユダヤ人の兄弟たちの手により異邦人に渡され、神はその状況を好転させ、全イスラエル (またすべての異邦人) が救われる道を備えられました。ヨセフの生涯にはイエスの生涯と共通する点が多数あります。イエスと一緒に死んだ二人の犯罪人、ヨセフと牢獄に入っていた調理官長と献酌官長のうちひとりには死に、ひとりが生き延びたことも考慮してみてください。

最初の到来においてイエスはヨセフの子、苦しみを受けるしもべとして来ました。彼はヨセフのように一日の間に責めを受ける場から栄光を受ける場へと上げられました。再臨においてイエスはダビデの子なるメシアとしてやって来ます。それは神の御名によってエルサレムに神の首都を建て上げるものです。イエスが戻って来られるとエルサレムから治められます。

「神の国は今」という教えを信じている人たちは、自分たちが新しいイスラエルであり、イエスが戻って来られた時に引き渡すため、自分たちが新しい御国を建て上げるのだと考えています。それは置換神学です。そのような人たちはたいてい後千年王国説信奉者たちです。彼らは千年王国がすでに到来しており、イエスが今すでに統治し、サタンはもう縛られていると考えます。ですがもしサタンが縛られているのなら、誰が彼の働きをしているのでしょうか? ニケア公会議以前の書物に見られることは、キリストが地上で支配する文字通りの千年間があると使徒たちが信じていたこと、またそれが初代教会で教えられ、広く信じられていたということです。

ユダヤ的観点から見ると、もし千年王国が存在しなければイエスはメシアではありません。メシアとなるためには、イエスは**すべての**メシアに関する預言を成就しなければなりません。それはヨセフの子に関して、イザヤ書にある苦しみを受けるしもべについてのものや、ダビデの子に関するものも成就する必要があるということです。しかし実際にはイエスはメシアに関する預言すべてを成就しませんでした。最初の到来においてイエスはただヨセフの子に関する預言、苦しみを受けるしもべに関する預言のみを成就しました。彼が戻って来られる時には偉大な王としてダビデの子に関する預言を成就されます。このためにユダヤ的観点からいうと、イエスがメシアであるためには地上でダビデのような支配を行う千年王国が必要なのです。彼は義をもって鉄の杖で支配されます。

イエスの最初の到来の際にはその良い知らせを全世界に知らせるため、神がローマ帝国とその道路と郵便制度を用いられました。第二の到来を控えた現代には全世界への福音伝播を拡大するために同じようにインターネットがサウジアラビアなどにも到達しています。

さらにこのような教父文書を見ていくと、人々が彼らを『教父 (*fathers*)』と呼ぶことが受け入れ難いことが分かります。エペソ 2 章 20 節には、使徒と預言者が教会の土台であり、イエスはその礎石であるとあります。**使徒たちと預言者たち**こそが父たちであり、**彼ら**が聖書を書いたのです。その後に見れた人たちは、しばしば聖書の本来の教えを歪曲してしまふ人でした。それゆえ人々が彼らを『教父』と呼ぶことにこだわるのは理解しがたいことです。彼らはいくつかの教会にとって父となったかもしれませんが、その教会とは東方正教会やローマ・カトリック教会なのです。彼らはキリスト教の父たちではありません。使徒たちと預言者たちこそが父たちであり、聖書的に言えば他の誰でもありません。

● 急増する誤りと教会の『ギリシア化』

殉教者ユスティノスは 2 冊の非常に影響のある弁明を書きました。そして第二のものは迫害を誘発するのに大いに貢献してしまいました。彼はまたトリュフォンというユダヤ人とも議論をし、その記録が今日まで残っています。それは主要なキリスト教学者と、ユダヤ教学者の間でなされた最初期の議論でした。

かつて聖書に対してふたつの思考、ヘブライ的思考とギリシア的思考が用いられていました。ヘブライ的思考は「神を信頼しなさい。そうすると理解できるだろう」と考えます。ギリシア的思考は「まず理解して、それから神に信頼できるだろう」といいます。神は**どちらの考え**も用いています。

聖書は決して盲目の信仰を教えていません。イザヤ書は次のような言葉で始まります。

『「さあ、来たれ。論じ合おう」と主は仰せられる』(イザヤ 1 章 18 節) そしてヨハネ 5 章でイエスはご自分を信じるための証拠を持ちだされています。パウロは『モーセの律法と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しよう』し(使徒 28 章 23 節)、アポロ(使徒 18 章 28 節)やペテロ(使徒 2 章 36 節)も同じでした。イエスはおそらくペテロに教えたことでしょう(ルカ 24 章 44 節)。

神はギリシア的思考法を用いて、人々を信者にします。しかし人が信者になった後にはヘブライ的思考に従うことを期待されています。信者は信仰によって歩むのであって、見るところによって歩むものではありません。パウロは『ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します』(1 コリント 1 章 22 節)と語り、それが彼の到達した結論でした。神は誰かを信仰に導くためにギリシア的な思考を用いられますが、イエスが主であると信じるようになると、ギリシア人のような行いを止めて、ヘブライ人のように——メシアニック・ジューのように振る舞うことを期待されています。信仰によって行動し、後に理解がついて来るのです。

● 異なった福音

福音を再文脈化するのは有効ですが、福音を再解釈したり、再定義したりすることは間違っています。

ウィクリフの翻訳者たちが赤道直下にいるアフリカの部族の元へ行った時、人々は一度も雪を見たことはありませんでした。それゆえ彼らがイザヤ 1 章 18 節を訳すとき、「あなたの罪は雪のように白くなる」という箇所を「あなたの罪はココナッツのように白くなる」と訳しました。これは全く受け入れられるものです。それは福音を再定義したのではありません。ただそれを人々が理解できる形で再文脈化したのです。しかし物事が再定義されるとき、そこには問題が生じます。初期の教父たちの多くは、アリストテレスやプラトンが用いたような用語をもって、聖書をギリシア的用語で再定義し始めてしまいました。

ヨハネの福音書 1 章は非常にヘブライ的な観点で書かれています。すべてのギリシア人はヨハネの福音書で次のように書いてある箇所まで同意できました。『ことばは人(肉)となって』(ヨハネ 1 章 14 節)彼らがこの言葉を受け入れられなかったのは、霊的なものは善で、物質的なものは悪だというプラトンのギリシア的価値観を持っていたからです。創世記では肉はとても良かったと言われています。それはただ墮落しただけです。このギリシア的、またプラトンの考えが教会に入ってくるやいなや、キリスト教は再定義されてしまいました。それはユダヤ的な文脈から離され、ギリシア的な文脈にはめ込まれ、異なった福音となってしまったのです。

これは特にローマ・カトリック主義と東方正教会の出現に伴って曲解されていきました。アウグスティヌスは結婚の唯一の良い点は、独身になる子どもを産むことだと語りました。彼はすべてのセックスが悪で不道德なものだと考えていました。人々は後にこの考えを取り上げ、すべての性交渉が罪だとしました。すべての人が独身になるべきで、修道士や修道女になることが聖いという考えは、聖書のどこにも見当たりません。これらはすべて、物質的な世界が悪いとするギリシアの哲学的思考から来ています。

ある人たちは、イエスが人の肉体をとった神であったはずがないと語りました。彼らはイエスが完全に神であり、それゆえに霊だと主張しました。それゆえイエスが砂浜を歩いても何の足跡も残さず、ただ人間のように見えただけだと主張します。多くの教父たちがこのようなギリシア的思考を採用しました。それは単に福音をギリシア人に伝えるためではなく、福音をギリシア的観点から再定義してしまったのです。彼らはそのまま信じる事が出来なかったため、リベラルが今なお行っているように、自分たちの説明を作り出してしまいました。

教会教父のある者たちは、これらの異端的な影響に対して教会を守ろうとしました。他の者たちはそれらを広めていました。このようなことを振り返ってみると、ラビ的ユダヤ教が本来のモーセ的ルーツから遠く離れてしまったように、キリスト教も本来のユダヤ的ルーツから遠く離れてしまったことが一目瞭然といえます。

● ローマ・カトリック主義と東方正教会を作り出した 5 つの哲学

要約すると、教会と対立していた 5 つの主要な宗教哲学がありました。それは以下のものです。

第一に当時、ギリシア・ローマの宗教は占星術に基づいていました。現代では占星術が再び大きく姿を見せています。イスラエル北部のキブツ・アルファにあるシナゴグ跡を訪れた人なら、そのモザイク画の床に占星術的な碑文を目にします。エルサレムのドミティアヌス大修道院では床にモザイク画で 3 つの同心円が描かれてあります。一番内側の円はヤコブの 12 人の子ども、イスラエルの族長たちを記しており、次の円は彼らと関連して十二使徒が記されています。ですが一番外側の円は星座が記されています。私たちはゼウスやユピテル、マーキュリー、キューピッドなどを、ただの神話の登場人物にしか思わないかもしれませんが、パウロはギリシア語でそれらを悪霊（ギリシア語：ディモイノイ）であると書きました。それはあたかもモーセが他の神々を悪霊を意味する『シェディーム』と呼んだ七十人訳を引用しているようです。現代、ギリシアの古典は単に文学として読ま

れていますが、初代教会にとってはそのようなものが偶像礼拝と関わっていたので、悪霊的だと考えられていました。

初代のクリスチャンたちは大きな問題に立ち向かっていました。ギリシア世界とローマ世界の大半で、同性愛と両性愛はただ流行していただけではなく、カルトの神殿娼婦などのように宗教的な特色が色濃く付随していました。初代のクリスチャンたちはこのようなものに立ち向かっていたのです。聖書を信じるクリスチャンと同性愛世界の争いが、同じ結末に至ることは疑う余地がありません。同性愛の暴徒によるクリスチャンへの荒々しい迫害——それが初代教会で起こっていたことであり、ソドムでの出来事を反映していました（創世記 19 章）。

第二にバビロンには神秘宗教が存在しました。秘密告解や秘跡、丸い形をした聖餐式でのウエハース、『司式者』が太陽の神を表しているなどのもの——これらはバビロンに由来し、その神秘宗教はギリシアを通してペルガモに至り、ローマ世界に入り、そこからフリーメーソンや、ローマ・カトリックなどに入っていました。

第三のものはストア主義です。皇帝マルクス・アウレリウスはストア主義者でした。ストア主義とはエピクロス主義の反対です。それは苦行のようなものを強調していました。「触ってもいけない。触れてもいけない」これをするな、あれをするなというものです。パウロは次の箇所でこのことについて書いていました。

『そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。』（コロサイ 2 章 23 節）

ストア主義の現れは今日、ローマ・カトリックが存在する場所に見受けられます。それは自分自身の罪を部分的に贖わなければならないとした考えを付け加え、まさにパウロが警告していた自己卑下に強調を置いています。『賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもない』（1 テモテ 4 章 8 節）——カトリックやその他の者たちの中で、彼らの母なる教会に対して、分かりやすい謙遜と従順を示すため顔を伏して、ひれ伏す行為がされているのはそのひとつです。

これはルネッサンスの初期にローマ・カトリックが、大聖堂やバシリカを建てようとして、お金集めをした時に悪用され、（罪を支払うとされた）贖宥状や、自分の母を煉獄から出すために払うお金、またそのために司祭に祈ってもらうためにお金を払うことなどで表面化していました。ローマにはスカラ・サンクタ（*Scala Sancta* 聖なる階段）というもの

があり、体を悪くし、年を取った女性たちがロザリオを唱えながら、上ったり下りたりしています。メキシコのグアダルーペでも同じような光景があります。カナダのモントリオールにあるフレール・アンドレの大聖堂では、人がアンドレの心臓を瓶に入れ、ロザリオを唱えながら階段を上るようなことまでしています。このような苦行は聖書の語る肉を十字架に付けることではありません。これらの行いは自分を贖おうとする考えであり、自分の罪の価をどうにかして支払い、特定の行いをするによって十分な恵みを蓄えようとする行為です。一方でこれらの考えは一般の人をあまり引き付けるものではありませんでした。これらのものは快樂にふけていたエピクロス主義者への反発として特定の知識人や、貴族の中で流行しただけでした。

第四のものはラビ的ユダヤ教です。これはかつてナザレ派と呼ばれ、教理的にも健全であった本来のユダヤ人クリスチャンの信仰ではありません。当時その中でも後に異端となった分派がふたつあります。ひとつは本質的にグノーシス主義であるエルカス派 (*Elkasites*)、もうひとつはエビオン派 (*Ebionites*) と呼ばれる者たちでした。今日のイスラエルにもエビオン派は存在します。それはイエスをメシアだと信じるが、イエスの神性、イエスが神であることを否定する者たちです。

五つ目は皇帝崇拝——皇帝の指輪や足などに口づけをする行為です。

これら五つのもの——ギリシア・ローマの宗教、バビロンの神秘宗教、ストア主義、ユダヤ教、皇帝崇拝、これらがスミルナの教会と、二、三世紀のクリスチャンが直面していた事柄であり、後にローマ・カトリック、また東方正教会として知られるようになったものを形成していきました。

● ユーゴスラビアのホロコースト

西洋では注目はローマ・カトリックに集まっており、東方正教会との関係はほんのわずかしかなかった。しかし中東では焦点がシリア正教会やギリシア正教会などに移っていきました。中世にはローマからの分離が起き、その境界線は現代のユーゴスラビアでした。そこでギリシア語を話す東側とラテン語を話す西側が会合しました。その場所はまた、イスラム世界がキリスト教世界と数世紀にわたって直面した場所でもあります。今日世界各地で起こっていることは、そのルーツが確実に存在し、昔の時代までさかのぼるものです。後にセルビア人が正教会の伝統を受入れ、ギリシア語を話すようになり、クロアチア人がラテンの伝統を受入れるようになったのもその一例です。

1930年代と1940年代にはユダヤ人に対して行われたのと同様な悲惨なホロコーストが

起こりました。その実行者たちは、正教会系のセルビア人に対してイスラム教徒たちの助けを得たローマ・カトリック系クロアチア人たちでした。これはただ単にローマ・カトリック教会の参加によってなされただけではなく、ローマ・カトリックの聖職者たちが命令したものでした。そして彼らは70万人を越えるセルビア人たちを殺害しました。東方正教会に属していた人の命が救われる唯一の道は、ローマ・カトリック教会へ洗礼を受けることだけでした。これは事実上バチカンの是認のもとで行われました。今日私たちが目にしていることは、その場所で本当に長い間繰り返されてきた争いの延長線上なのです。

● ルネッサンスの教皇たちのアイデンティティー

ルネッサンスの当時、教皇たちは自分たちのことを教会を迫害した異教の皇帝たちと同一視するようになりました。バチカンにある教皇のチャペルには、特定の教皇の紋章が飾られています。このようなものは異教の皇帝から採用されたものです。この時代に、イタリアで敵対していた富裕層の銀行家たち、ブルジョワ家やメディチ家らは、陰謀や策略、聖職売買、軍事力を用いて自分の氏族の者を教皇の座に就かせようとしていました。また異教の皇帝たちがローマの宗教的なパンテオンの頭であり、「ポンティフィカス・マキシマス」の称号のもとに宗教や経済、国家をまとめていたように、教皇たちは帝政ローマと教皇が支配するローマとの関係を示すため、皇帝たちと同一視されることを望みました。そして今度は教皇が支配するローマが異教のローマより、確実に多くのクリスチャンを殺していきました。しかし、それらルネッサンス期の教皇の宮廷にある紋章や、彼らの墓石には彼らを称える献辞が記されています。

● 主要な迫害者たち

教会をひどく迫害した最初の皇帝はネロでした（クラウディオスは比較的穏健でした）。エウセビオスによるとこのネロがペテロとパウロを殺しました。エウセビオス（紀元260-340）はパレスチナ、カエサリヤの主教であり、歴史上初となる包括的な教会の歴史『教会史』（*The Church from Christ to Constantine*）を記しました。

ネロは彼の母親と奇妙な関係を持っていました。その関係は旧約聖書の女王アタルヤとその息子（2歴代誌22章2節-4節）と非常に似通っています。息子が母親に奇怪な行為をさせ、後に母親に敵対しました。ここには深い象徴が存在します。ネロは最初キリスト教徒たち、または外見的にユダヤ人に対しても好意的でした。しかし彼らの信頼を得るために偽りの好意を示していただけであって、後に本性を現しました。これは以前に見たユグノーに対して教皇が取ったものと同じ手段です。

初代教会が皇帝崇拜と反キリストとをいかに関連付けていたかを理解することは重要です。反キリストはネロのような者です。自分を素晴らしい人と見せかけるために最初は好意を持っているかのように（堅い契約を結び—ダニエル 9 章 27 節）見せます。黙示録でその角（かつており、今はおらず、やがて来る偽りのキリスト）について語られている箇所を、初代の信者たちはネロに当てはめ、彼が何らかの形で生まれ変わった者だと考えていました。名前の文字を通して読み取れる数字から 666 という数が最初に発見されたのはネロでした。そしてネロの治世下、ローマに火事が起こった時に初代信者たちは、ローマをバビロンと同一視し、「これはイザヤやエレミヤが語っていたことだ。『倒れた。バビロンは倒れた』（イザヤ 47 章、エレミヤ 51 章）」と考えました。ご存知のようにこれは後に黙示録に記されました。

ネロとその他すべての皇帝たちは、最初は教会に敵対し、それに続いてユダヤ人にも敵対しました。キリスト教徒へのネロの迫害からほどなくして、ティトスというローマ軍隊長がイスラエルに赴き、ユダヤ人の反乱を鎮め、紀元 70 年に神殿を破壊しました。その軍事作戦はネロのすぐ後に続きました。教会が迫害されている間は、ユダヤ人たちはかつてない繁栄の期間を過ごしました。このようなことが終わりにも繰り返されます。この世の皇帝はどのようにかして好意を持っているように見せかけ、ある程度までクリスチャンさえも欺くでしょう。またユダヤ人のほうは、メシアによる繁栄を享受していると考えますが、後にその人物は本性を現すのです。これがティトスの行ったことでした。

同じことが二世紀にも起こりました。二世紀にもとてつもない迫害があり、その後にバル・コクバの乱があり、ユダヤ人に対して虐殺が行われました。1920 年代まで、ユダヤ人の歴史で過去最大の大量殺戮はバル・コクバの乱でした。イスラエルのユダヤ人たちは事実上壊滅させられ、約 2 千年間ディアスポラ（離散）させられました。

反ユダヤ主義と教会の迫害の間にある神学的関係を理解することは非常に重要です。それはひとつのコインの表と裏です。両者を区別することはできますが切り離すことはできません。神は創世記 3 章 15 節で言われました。『わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く』その女エバはイスラエルを象徴しており、ひいては教会の象徴です。

共産主義者が誰を最も迫害したか覚えているのでしょうか？ユダヤ人と新生したクリスチャンです。またローマ・カトリック教会は誰を最も迫害したでしょうか？ユダヤ人と新生したクリスチャンです。今日、イスラム教徒は誰を最も嫌っているのでしょうか？ユダヤ人と新生したクリスチャンです。この理由は単に偶然であるとか、さらには歴史的、社会的なものではありません。この理由は実際、神学的なものであり、霊的なものです。それら

べてはどれも創世記3章にさかのぼります。

● 十日の間の迫害

イエスはスミルナの教会に語りかけられました

『あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。』（黙示録2章10節）

この箇所を理解するために、ローマ・カトリックから『センス・プレニア (*Sensus Plenior*)』という神学用語を借りてきたいと思います。この『日』という言葉は文字通りの日ではなく、10の期間を表しています（創世記の暗やみと光の期間のように、夕と朝があったのが最初の日です）。それゆえ、これは悪魔に取り付かれたような皇帝たちによってなされた、10の迫害の期間のことです。

- ドミティアヌス 81-96
- トラヤヌス 98-117
- ハドリアヌス 117-138
- アントニヌス・ピウス 138-161
- マルクス・アウレリウス 161-180
- コンモドゥス 177-192
- セプティマス・セベリトゥス（英語の厳格さ『*severity*』の由来）192-211
- デキウス（残忍な人物だったが幸運にも長くは続かなかった）251-251
- 最終的に最も残忍だったのは285年頃のウァレリアヌスとディオクレティアヌス

● 妥協

クリスチャンたちに最も深刻な損害を与えた迫害者は、デキウスのように彼らを妥協に導いた者たちでした。それは基本的に三つの方法によります

- 初めにリブレケイト（書類証明のみの行為）がありました。妥協した者たちは皇帝を拝んでいないにも関わらず、拝んだという文書を金で買っていました
- 次にサーリフィケイト（形だけの儀式）です。彼らは宗教的であり、皇

帝にいけにえを完全にささげることはしませんでした、香を焚きました

- そして最後にはサクリフィケイト（完全ないけにえ）がありました。妥協した者たちは公に皇帝にいけにえをささげたのです

ディオクレティアヌス帝は、ローマ帝国の宗教的思考を学校制度を用いて広めようとしていたポルフィリーという者から影響を受けていました。このためクリスチャンたちは教育制度と激しい対立関係に入りました。

再び同じような兆候が今日起きています。多くのクリスチャンの両親は自分の子どもたちを公立学校へ行かせず、金銭的成本があるにもかかわらずホームスクーリングするか、私立の福音派の学校に入れています。なぜなのでしょう？たとえばイギリスの英国国教会系の学校では、非常に敬虔なキリスト教徒の校長がシュロップシャー州での宗教教育のマニュアルの内容を公開しました。その表紙にはラビがトーラーを読み、ローマ・カトリックの祭司がミサを唱え、イスラム教のイマームがメッカに顔を向け、ヒンドゥー教徒や仏教僧侶の姿などが載っています。そして最初の課は巡礼についての課であり、そこには（これが教師のための指導マニュアルであることを思い出してほしいのですが）「これらのことは強調され、子どもたちに深い印象を与えなければならない。なぜならそれらが色鮮やかで意味深いものだからだ」と書いてあります。この哲学の背後にあるのはニューエイジであり、すべての信仰には共通の正当性があると伝えることで、多民族社会に調和をもたらそうとしています。その目的は幼くて感受性の強い子どもたちに歌や祭り、物語、絵本などを通して影響を与えることにあります。これが巡礼に関する課の内容です。カトリック教徒はルルドに行き、ユダヤ教徒らには巡礼祭があり、イスラム教徒らはメッカへ向かうハッジ、ヒンドゥー教徒らはラマヤシトラがあります。これがイギリスの公立校で教えるよう法律に定められているもので、英国国教会系の学校でさえ、現在そのカリキュラムを利用しているのです。しかしこのようなことを慎重に突き詰めていくと、人々はただ福音的なキリスト教を妥協するような道を選ばされているにすぎません。言い換えると、初めにあったものは現代も同じだということなのです。『日の下には新しいものは一つもない』

イギリスのバプテスト連盟が、ローマとのエキュメニカル的な一致も含む教会間のプロセスに入り論争が起きていた時ある人が言いました。「私はバプテスト派で、ただ聖書がローマ・カトリックや他の非福音派の教会についてどう語っているかということに関して、伝統的なバプテストの立場に立っているだけなのだ」

彼らは答えました。「バプテストの伝統とはどのようなものを言うんだ」

それに対して「ジョン・バニヤンやウィリアム・ケアリー、チャールズ・スポルジョンらのことだ」とある人が言いました。

そしてバプテスト連盟の議長は「そうだな、でも彼らはみな意見が一致していなかったのではないか」と言う

こう指摘した者がいたのです。「ローマ教会に関しては意見は分かれてはいかなかった。スポルジョンからの引用をお聞かせしましょうか」

しかしその議長は聞こうとしませんでした。彼は話題を変えたのです。そしてローマと妥協してしまいました。

英国国教会でも同じようなことが起きています。リベラルなアングロ・カトリックの司祭たちは、クリスチャンになるのに復活や処女懐胎を信じる必要は無いと言っています。元カンタベリー大主教のジョージ・ケアリー (*George Carey*) は『*The Meeting of Waters*』(融合) という本を書き、ローマとのエキュメニカル的な再統合を呼び掛けています。さらに『福音派』や『聖書を信じる』司祭らでさえ事を荒立てようとはせず、何も言おうとはしません。サーリフィケイト(形だけの儀式)、融合のために時折、偽りの神に香を焚き、偽りの儀式に参加すること、そのようなことは外面が違うだけで同じものなのです。『日の下には新しいものは一つもない』

バプテスト連盟や、英国国教会の中の福音派、アッセンブリーズ・オブ・ゴッドの中の大半の人はこのような異端に抗議し、福音派の主流が信じていたこと、また聖書の語っていることを支持するでしょう。しかしほぼ気付かないような形で、彼らはサーリフィケイト(形だけの儀式)に陥っています。そのような人たちは迫害を避けるために妥協を選んでいます。このようなものが初代教会で分裂をもたらしたのであって、今日も分裂しかもたらしません。

初代信者たちが完全な平和主義者たちのように考えられてきたのは、彼らが教理に関して平和主義者であったためではありません。それはローマの軍団に入ると皇帝崇拜が要求され、異教の神々に祝福を祈るといふ、クリスチャンが出来ないことを義務付けられていたからです。しかしながら、ローマ帝国が衰退するにしたがって、政府は責任をなすりつけるためのスケープゴートを探し始めていました。そしてクリスチャンが、その後にユダヤ人がそのスケープゴートとなったのです。ローマ帝国は国を一致させるため、中心となるべき宗教が必要だと主張するようになりました。

当時のクリスチャンたちはローマ世界と皇帝たちに対して、信仰を擁護する『弁明』を記していました。紀元 125 年にコドラトス (*Quadratus*) はイギリス北部の城壁で有名な皇帝ハドリアヌスに対して弁明を書きました。彼は癒しの奇跡と、初代教会における唯神論を強調しました。現代、御霊の賜物が十二使徒の死と共に終わったとする誤りの教理を信じる『終結論者 (*Cessationists*)』たちがいます。しかしながら、第二世紀の明確な歴史記録には、使徒たちの時代を過ぎてもそれらの賜物が続いていたという証拠がありません。

これまでの要点はこれです。ただ真実の信者だけがイエスを拒むよりも自らの死を選び、また家族が殺されることを選ぶということなのです。神は迫害と苦難を用いて教会を熱心にさせ、教会を異端や偽りの信条からきよめます。

● 現代の迫害

「殉教者の血は教会の種」と語ったのはテルトゥリアヌスでした。教会は迫害されればされるほど成長していきます。

私が 1970 年代にイスラエルに移住した当初、アメリカでジューズ・フォー・ジーザスが行っていたのと同じように、公で人目を引くような伝道がイスラエルでもなされることを期待していました。しかしその方法が間違いだとみなは言っていました。しかし、その後何が起きたかという、エルサレムのCongregationが放火に遭ったのです。ティベリアとバプテストハウスも放火に遭いました。1980 年代初頭に宗教政党がリクード党と連立を組んだとき、ラビたちはかつてなかったほど自分たちのルーツを政治的に考えるようになり、現地のカリストのからだに対して激しい圧力と迫害をもたらしました。しかしその迫害は教会を一致させ、福音に推進力を与えました。現在イスラエルでは多くのイスラエル人伝道者たちが路傍に出てトラクトを配り、イエシュアを賛美し、福音を積極的に伝えています。そのようなことがイスラエルの土地でなされたのは、初代教会の時代以来です。教会は使徒たちの時代に非常に内向きになっていましたが、ステパノの殉教の後に迫害が起こり、教会はそれに伴って宣教思考を持ち、外に向けられました。

偽りの教理はいつでも教会に侵入してきます。しかしそのようなものが入ってくるに従って、いつも迫害が偽りの信者たちを除去します。迫害は良いものではありません。迫害は悪いものであって、悪魔からのものです。しかし神はしばしばその中にも目的を持っておられ、教会にもたらされる善は悪よりも勝るのです。

『神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神が

すべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。』(ローマ 8 章 28 節)

西洋の教会が非常に物質主義的で、なまぬるく、ラオデキヤの教会の特徴を持ち、多くの偽りの教師の教えに惑わされてしまっているため、唯一の解決策は迫害しかないのではないかというのが多くの人々の見解です。とはいえ、誰も迫害が来るようにと祈るべきではありません。それは個人的な願いでも、誰かに対して望むことでもありません。しかしながら、西洋は取り返しのつかないところまで状況が悪化し、キリストのからだに非常に多くの偽りの教理と妥協が入り込んでいるので、教会には迫害がなければ矯正されることは無いだろうということは事実です。人々はパウロがテモテに警告したように「自分につごうの良いことを」言ってもらいたいのです (2 テモテ 4 章 3 節)。そして彼らは自分たちの望んだものを受け取っています。健全な教えではなく、つごうの良いことを耳にしているのです。

その当時の迫害の最中、またその後に登場した最大の欺きは「グノーシス主義」と呼ばれるものでした。そのグノーシス主義に対して、エイレナイオスは『異端反駁』を書きました。

現代のニューエイジ運動は新グノーシス主義とヒンドゥー教思想にそのルーツを持ち、再びキリスト教の主流に侵入して来ています。その中にはいわゆる福音派も含まれ、エキュメニカル・インターフェイス運動や、イマージェント・チャーチ (*the Emergent Church*) などの欺きが迫ってきています。これは当初、教えの識別力が欠如していたために、大部分がカリスマ派運動によって促進されてきました。カリスマ派運動は聖書的な本当の賜物を偽造し、真実の霊性を感情主義と神秘主義によって置き換え、聖書的な教理を感情を根拠とした神学と取り替えてしまいました。

しかしチャック・コルソン (*Chuck Colson*) のような人物のお陰で、この欺きは大半の伝統的な西洋福音派にも浸透していきました。カンザスシティの偽預言者たちや、トロント・エクスペリエンス、フロリダ・ペンサコーラのブラウンズビル・アッセンブリー・オブ・ゴッド、またレイクランドで失敗したトッド・ベントリー (*Todd Bentley*) などの偽のリバイバルでは、キリスト教のカリスマ (賜物) として、クンダリーニ・ヨガのようなヒンドゥー教の習慣が行われていました。

ワーシップ (礼拝) とされている非聖書的な歌詞を伴ったコーラスを何度も繰り返して歌うことは、実質的にクリスチャンを操り、欺きに誘い込むものとなっています。人々は単に聖書的でないような決まり文句を繰り返し歌うことによって、そのことで頭が一杯に

されるのです。このようなことはヴィンヤード運動の故ジョン・ウィンバーに関してよく見受けられたものです。現代 J・I・パッカー (*J. I. Packer*) などかつて尊敬を受けていた福音派の学者たちは、チャック・コルソンや元福音派のピーター・クリーフト (*Peter Kreeft*) の好むエキュメニカルやインターフェイス的な傾向に信頼を置いてしまっています。ダラス神学校の元教授であったジャック・ディアー (*Jack Deere*) もまたカンザスシティの偽預言者たち (ボブ・ジョーンズ [*Bob Jones*] のような性的捕食者、またポール・ケイン [*Paul Cain*] のような同性愛者／大酒飲みからなる集団) による後の雨運動に関して擁護論を書いています。カンザスシティの偽預言者とマイク・ビッケル (*Mike Bickel*) による偽りの教理と偽預言へのディアーの擁護は、ヨエル書の歴史的・聖書解釈的文脈を骨抜きにした、ただのグノーシス主義的『靈的解釈 (*spiritualization*)』にすぎません。

モルモン教も同じように創始者のグノーシス主義的な啓示に基礎を置いています。しかし最近では、米デンバーの西部神学校 (*Western Seminary*) のクレイグ・ブロンベルグ (*Craig Blomberg*) のようにかつては信頼を得ていた学者、またタルボット神学校 (*Talbot Seminary*) のクレイグ・ヘイゼン (*Craig Hazen*) のような学者、ラビ・ザカライアス (*Ravi Zacharias*) のような擁護論者らがモルモン教との妥協的な和解を推進しています。この破滅に向かう傾向はイマージェント・チャーチの現象において新しい悪魔的な退廃にまで達しました。イマージェント・チャーチはその教祖であるブライアン・マクラレン (*Brian McLaren*) とその支持者ダン・キンベル (*Dan Kimball*)、またこれを推進する本の前書きを書いたリック・ウォレン (*Rick Warren*) らによって進められています。

私たちは現代、西洋のキリスト教世界が東洋宗教とグノーシス主義に侵攻される第三回目を経験しています。第一のものはニケア公会議後のアレキサンドリアのオリゲネスやバシレイデス (*Basilides*)、バレンティヌス (*Valentinus*) の時代、アレキサンドリアのグノーシス主義的な聖書解釈がアンティオケの聖書解釈と対立した時です。

第二のものは十字軍が仏教、ヒンドゥー教、イスラム教から受けた影響をヨーロッパに持ち帰った時です。ロザリオ (数珠) を使って祈りを数える方法や、イコン (聖画像) の前で香やキャンドルを焚くことが東洋からもたらされ、自責行為 (鞭打ちなど) をすることはカルバラの戦い (紀元 680 年) でのアリー之死を悼んでいたシーア派イスラム教徒たちからコピーしたものです。

三度目に東洋宗教とグノーシス主義が西洋キリスト教に浸透してきたのは現代です。イマージェント・チャーチは新約聖書を目指すことなく、文字通り暗黒時代への回帰を追及しています。そして第 5 世紀から 8 世紀における神秘主義的な修道院制度をキリスト教靈性の模範的な姿だと説いています。この目標を達成するためにイマージェント・チャーチ

は『迷宮』から儀式的な祈りの行進、瞑想的な祈り、レクティオ・ディビーナ (*Lectio Divina*)、しばしば聖画像を含んだ瞑想による可視化テクニック、香、キャンドル、何度も繰り返す祈りなどまで多くのものを取り入れてしまっています。瞑想的な祈りにおける可視化の方法は初め、イエズス会創始者イグナチオ・デ・ロヨラによって洗脳テクニックと共に採用されました。イグナチオ・デ・ロヨラの支持者たちは幾千もの新生したクリスチャンを虐殺し、拷問にかけたことにおいて責任があります。

ロヨラは、もし教会が(教会といえはここでは教皇のことですが)「深夜に今は昼間だと言えば、私たちは信じなければならない」と言いました。この曲解された霊性によって、すべての重要な学問と、客観的な真理基準は放棄させられ、教会と教皇の権威が聖書に取って代えられました。トロントやペンサコーラ、レイクランドの欺きに黙って従うということは、それと同じように霊的識別、論理的思考、聖書的に論理付ける能力を放棄することを伴います。西洋世界での現代ニューエイジ運動の創始者、故テイヤール・ド・シャルダン (*Teilhard de Chardin*) がイエズス会士であったことは単なる偶然ではありません。しかしながら私たちが驚くべきことは、福音派と自称するジョイス・ハジェット (*Joyce Huggett*) や『スピリチュアリティー 成長への道』の著者であるリチャード・フォスター (*Richard Foster*) らがそのような悪霊的な手法を、自分たちで編み出したキリスト教の弟子訓練と共に祈りの鋳型として取り入れていることなのです。

一方で、このような偽キリスト教の流行はひとつの共通した特徴があります。そのすべてがグノーシス主義に由来しているか、またはグノーシス主義と教理的な妥協をしているという点です。このような悪霊的な流行に反対する者は排斥を受け、最終的に強い流れによって飲み込まれた者たちによって初代教会のように迫害されます。背教した教会は忠実な教会に牙をむき、福音派主義を引き裂くことになるのです。

さらに衝撃を受ける東洋宗教の例は、韓国のキリスト教系神秘主義者であるチョー・ヨンギが書いた『第四次元』に含まれるものです。チョー・ヨンギ (*David Yonggi Cho*) は潜在的な想像力がその人の霊であると主張し、実際にはそれがたましい、思考の機能であることを理解していません。彼自身の教えの中で、チョー・ヨンギは自分の想像力の中で自らの望みを可視化し(思い描き)、『信仰のことば』の手法により、言葉によって実現するという考えを支持しています。彼はヒンドゥー教徒や仏教徒が何世紀の間もそれを知っていたが、今度はイエス・キリストが自分に示したのだと言います。チョー・ヨンギは純粋な東洋系シャーマニズムを教えていながら、それを『キリスト教』と呼んでいます。チョー・ヨンギ氏がクリスチャンであるかどうかは知りません。ですが、彼の信条の点からいって、確実に仏教徒でありヒンドゥー教徒なのです。

グノーシス主義の問題は、ペルガモの教会を見ていく中でまた触れることとします。ここで言いたいのは、神がスミルナの教会の時代に迫害を用いたということです。神が迫害を許されたのは教会の不純物を取り除くためであり、余分なものを切り取るためでした。そして迫害は害よりもより多くの善をもたらしました。殉教者の血は教会の種となったのです。

これが初代教会で真実であったのと同様に、イエスが戻って来られる前にも、これが現実となるということは疑う余地がありません。